

後期密教における性理論の導入について（１）

密教学科 聴講生 金谷利治

後期密教において、仏教教理に「性の理論」（セクソロジー）と「死の理論（タナトロジー）」が導入されたことは有名である。かなり衝撃的な内容を含み、日本ではほとんど受け入れられることがなかったが、チベットでは、先人たちの多大な努力の結果、後期密教教理を仏教の中に適切に取り込み、後期密教の姿を現在に伝えている。仏教が13世紀初頭インドで滅び、残念ながらインドには後期密教の伝統を見出すことは難しいというのが現状であろう。本レポートでは、これまで日本で行われてきた後期密教の研究、特に田中公明の研究[1997]¹を基に、後期密教における「性の理論」（セクソロジー）導入について概観する。

１）はじめに

中世のインドタントリズムには、ヒンドゥー教、仏教、ジャイナ教など宗教の枠を超えて、共通の要素が数多く見られる。このタントリズムの1つの原因として、土着宗教が予想される。タントリズムにおいては、仏教でもなく、ヒンドゥー教でもなく、ジャイナ教でもなく、反社会的な性的な儀礼や墓場で繰り広げられる呪術的な饗宴を含んでいたこと、また反アーリア的な要素が多かったことも土着宗教であったことを示唆している。一方、中世のインドでは、農業生産力の向上や西域との貿易により、社会として大きな富がもたらされ、享楽を求める雰囲気の中にあり、そのためこの特異な性的な要素が強い土着宗教が広まり、広く汎インド的に受け入れられたとも考えられる。この反社会的要素を多く含む土着宗教を津田真一は「尸林の宗教」と名付けた。この土着宗教の特異な反社会性のため、日本では後期密教が受け入れられることはなく、また後世にはその特異性が大きくクローズアップされ、一般的な後期密教の印象を作っていると思われる。

後期密教の特異な反社会性について、松長有慶[2006]²は仏教的立場から、「殺」と「淫（性）」と「暗黒の呪法」の三点に絞って取り上げる。「性」については、性エネルギーの解放と農耕民族における生殖→多産→繁栄の立場を述べ、『秘密集会』『五次第』の双入次第については、一切の対立原理を二元のままに一元化する働きと述べている。また、「殺」については、如来の聚を殺すとは五蘊を自性として実態なしと破壊すべし、と解釈して、どの場合にも大悲心がその根底にあるとした。「暗黒の呪法」についても、恐ろしい呪祖を、仏教的に解釈するようになったと記述し、正当化を図ったように見える。

しかし、この土着宗教は、仏教の立場から見ると、やはり異端とも映り、仏教とは直接の関係はない、土着宗教と予想される。[田中公明、1997]では、以下のように書かれている。

¹ 田中公明、1997、『性と死の密教』、春秋社

² 松長有慶、2006、『『秘密集会タントラ』欲を生かして育てる』、インド後期密教（下）、松長有慶編、萩原印刷、pp.67-74

この土着宗教は、中世インドの葬場、尸林を舞台としてくりひろげられた。多くの場合、尸林には土着の女神の祠堂があり、地元の巫女によって祭祀が行われていた。彼女たちは、尸林を舞台とする黒魔術的な秘儀を行う魔女でもあったが、一つの母系社会を形成しており、社会的にも一定のステイタスを保っていた。そして尸林の巫女たちは、巡礼にやってくる男性—おそらく宗教行者—と、密かにあるいは公然と性的関係を結ぶことがあった。そしてヒンドゥーのタントラにおいて「チャク・ラプージャー」³、仏教のタントラで「ガナチャクラ」⁴と呼ばれる饗宴は、彼女たちが、巡礼にきた男性行者と関係を結ぶための儀礼から着想されたものと思われる。

このような「性の宗教」は、インドで九世紀に隆盛のピークに達するが、それ以後しだいに、行き過ぎた傾向に対する反省が現れ、性的な要素を宗教的に昇華した解釈に置き換えようとする動きが顕著となる。土着宗教から導入された性的要素が、どのように仏教に受容され、どのように体系化されたのか、見ることにしたい。

2) 生起次第

ブッダの成道

ブッダの成道（悟りを開く）は仏教徒にとって最大の関心事の一つであることは言うまでもないが、ブッダの成道には、いくつかの説があることはよく知られている。その中でも多いのは、29歳で出家し、6年間の苦行を行うが、苦行では悟りを得られないと感じ、村娘スジャータから乳粥を供養され、体力を回復して、菩提樹の下で静かに瞑想することにより悟りを得た、というものである。ただ、悟りの内容となると、『阿含経』（上座部經典）では、「縁起の法」を悟ったこととされ、『大般涅槃経』（大乘經典）では、「空性」の悟りとして語られる。『華嚴経』（大乘經典）では、ブッダは成道の直後に「法界」を悟り、宇宙の根本原理を知ったと言われており、どのような真理を観察したかは、經典により分かれるところである。大乘經典である『方廣大莊嚴経』⁵では、色界の最高位四禪の瞑想のレベルにおいて、衆生の苦悩の原因を順次さかのぼって無明に至り、さらにその無明を滅して苦悩の原因を断つという、「十二因縁の順観と逆観」の真理を観察して、悟りを得たとされる。この十二因縁と輪廻転生が仏教教理の性理論化と関わっていく。

一方、『金剛頂経』『五相成身観』における悟りのプロセスは異なり、菩提心を基にした密教

³輪坐礼拝。ヒンドゥー教タントラ派の儀礼。男女が深夜ひそかに輪になってすわり、近親、階級、種族に制限なく、酒、魚、肉、炒り米、性交の5つを享樂する。これら5つの語はどれもMの音をもって始るので、「5つのM」といわれる。ブリタニカ国際大百科事典小項目事典

⁴後期密教における集団的修法「ガナチャクラ(聚輪)」

⁵『方廣大莊嚴経』(=『ラリタヴィスタラ』)大乘經典であり、ブッダの降生から初転法輪に至る前半生を記した仏伝であり、多くの奇跡に重点を置いている

の立場から新たな成道を示したものと言える。一見、性理論化とは全く関係がないように見える「五相成身観」であるが、ここでも性理論化が進み、十二縁起説と輪廻転生に結びついていくのである。

『俱舍論』における十二縁起と輪廻転生

まず部派仏教教典である『俱舍論』⁶を見ておこう。そこでは十二縁起が輪廻転生と結びつけて解釈されている。そのためには、輪廻転生のメカニズムを説明しなければならず、『俱舍論』では、衆生の転生と受胎に関する理論が展開される。

衆生は死ぬと「中有」と呼ばれる状態に入る。仏教では諸法無我といい、不変で固定的な自我とか靈魂の類を認めないが、一方では因果応報も説くため、業による果報を受けるものが、何かしら存在しなくてはならない。そこで仏教では、色受想行識からなる五蘊は、前世の五蘊が転移したもので、解脱しないかぎり、つぎの生に引き継がれると解釈したのである⁷。

中有は煩惱に塗れた衆生の五蘊であり、香を食して生活するガンダルヴァと呼ばれる。

このガンダルヴァは、未来の父母の性行為の場面に遭遇し、母親の子宮にある「赤白二滴」、すなわち母親の経血と父親の精液の混合物の中に吸着される。このように母胎に取り込まれた生命はいわゆる「胎内五位」⁸を経て成長し、やがて出産に至る。

『俱舍論』では、十二縁起の各支は、以下のように衆生の輪廻転生のプロセスと結びつけられている。まず「無明」とは、前世における煩惱にまみれた五蘊と定義される。つぎの「行」は、前世においてなした善悪の行為と、それが現世に果を生じるまでの余力とされている。これらの二支は、現世ではなく**前世**に配当される。

そして前世が終わり、ガンダルヴァが、新たな母親の子宮に宿る受胎の瞬間が、「識」である。六つの感覚器官が形成されるまでの間が「名色」であり、形成されると「六処」の段階に入る。胎児は誕生の時を迎えるが、感覚は備わっても、いまだ感覚対象を弁別できない段階が「触」である。さらに感覚対象を弁別し、苦楽の原因を明瞭に判別できるようになっても、いまだ性欲を生じない段階が「受」であり、さらに性欲が生じて、いまだ活発に追求しない段階が「愛」である。そして成人し、種々の活動をする段階が、「取」である。「取」に相当する期間は、成人してから死んでつぎの生を迎えるまでとされて、以上の八支は現世に配当される。

現在の生が終わり、ガンダルヴァすなわち死者の五蘊が、新たな母親の子宮に宿る受胎の瞬間、つまり現世の「識」に相当する段階が、「生」である。そして来世において、現世の「六処」から「受」までに相当する段階が、「老死」である。これらの二支は、現世を終えた来

⁶ 「世間品」(T No29) (第十一卷)

⁷ 後に唯識学派では阿頼耶識を設定し、それが業を引き継ぐと考えたのは、周知のところである。

⁸ 胎児が母胎の中で育成する過程を五段階に分けたもの。『俱舍論』巻九等に説かれる。(1) 卵子と精子が和合する段階 (2) 胞のように育つ段階 (3) 血肉を成ずる段階 (4) 肉が厚く堅く育つ段階 (5) 手足が形成され、六根がそなわって出産に至る。

生に配当される。

このように『俱舍論』は、「十二縁起」のうち、第一と第二の無明と行を前世、第十一と第十二の生と老死を後生、その他を現世に結びつけて解釈した。これが過去・現在・未来の三世にわたり、迷いに基づいて業を積重し輪廻転生するという、「三世両重の因果」と称せられる定式である。

ここですぐに分かるように、十二縁起節では、人の死（すなわちガンダルバの生）、人の生ガンダルバ（ガンダルバの死）が輪廻転生の大きな契機として描かれている。

「五相成身観」の変遷

密教におけるブッダの成道としてよく知られている『金剛頂経』に説かれる五相成身観は、①通達菩提心、②修菩提心、③成金剛身、④証金剛身、⑤仏身円満という5つのプロセスからなり、日本真言密教の瑜伽観法の中でも、最も重要なものである。一見「性理論」とは無関係なように見える。しかし、後代になると、『金剛頂経』に基づいて製作された、注釈書や儀軌類には、この完成された「五相成身観」の5つのプロセスに、種々の観想法が付加されるようになってくる。

釈タントラ『金剛頂タントラ』⁹では、①通達菩提心のほんやりした月輪形の中に、②修菩提心における第二の月輪を観想すると説くようになる。さらには、『秘密相経』¹⁰(グヒヤマニティラカ)では、①通達菩提心において出現する第一の月輪中に、A をはじめとするサンスクリット語の十六の母音字、②修菩提心において出現する第二の月輪中に、Ka をはじめとする三十四の子音字を、観想すると説くようになった。この変化について、田中公明¹¹は以下のように述べている。

五相成身観は、日本真言密教の根本聖典である『金剛頂経』に説かれる瑜伽観法の中でも、最も重要なものである。そこでこのような発展も、わが国の学者によって解明されてはいたのだが、どうしてこのような観法が付加されたのか、その理由がよくわからなかった。そこで「五相成身観を実際に修しても、成仏の実感を著しく欠くものであったから、修法の過程を複雑化することにより、実感を増加せしめようとした」と解釈されたのである。しかし過程を複雑にするだけなら、ほかの観法でもよかったはずで、第一月輪に母音字、第二月輪に子音字を観想するというプロセスが、なぜ導入されたのかは、依然として不明であった。

しかし、以下に見るように、これは五相成身観への性的要素の導入の、まさに最初の一步だったのである。

⁹北京 no.113（孫引きです）

¹⁰T no.884

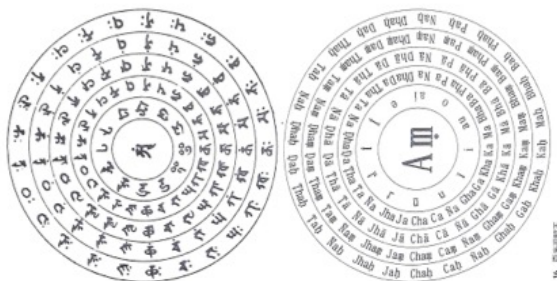
¹¹[田中公明 1997]、p.48-49、//16-21

『サマーヨーガ・タントラ』¹²の登場

『サマーヨーガ』から、後の後期密教へ継承された思想の中に、文字鬘(文字が数珠のように連続したもの)の観想法がある。この観想法が、密教におけるセクソロジーの発展史の上で、どのような意味をもっていたのだろうか。文字鬘では、大日如来の種字「あ」を中心に、二十五の子音字に修行点と空点と涅槃点を加えて、合計百字を配する(図参照)。大日如来の種字「あ」を中心に配置された百字は、大日如来の宇宙的な展開を象徴する。中心にある種字「あ」は、大日如来の根本的な智慧(法界体性智)であり、真言において無限の可能性、根源、空(くう)を表す。周囲の二十五のサンスクリットの子音字(ka, kha, ga, gha,...)は、大日如来の教えがさまざまな形で展開されることを示し、宇宙の五大要素(地・水・火・風・空)や五智を表すこともある。すなわち、全てを生み出すのです。さらに、二十五子音字にそれぞれ、修行点、空点、涅槃点を加えることで、修行の過程、空性の悟り、悟りの完成を示す。

「百光遍照王」では、根本仏大日如来は男性であり、一人で全てを生み出すことより、いわば単性生殖となっていた。これに対して『サマーヨーガ』では、母音字と子音字の組み合わせによる男性と女性の間での両性生殖が説かれていると見ることができる。すなわち、『サマーヨーガ』では仏教に性的要素を本格的に導入したといえるだろう。

『サマーヨーガ』の月輪と文字鬘の観想は、『金剛頂経』系から後期密教系の五相成身観へと道を開き、曼荼羅の観想への性的要素の導入は、後期密教の実践階梯の一つ「生起次第」へと発展して行く。



『ヘーヴァジュラ・タントラ』への発展

『サマーヨーガ』によって仏教に導入された「性の宗教」については、九世紀に入ると、さらに多くのタントラ文献が作られる。その中でも9C半ば以降に成立されたとする『ヘーヴァジュラ・タントラ』は、後期密教の性理論を論じる上で、避けて通れない重要なテキストである。『ヘーヴァジュラ』では、『金剛頂経』のように、ブッダがどのように成仏したのかを直接説いた部分はないが、「第一儀軌」の第八章より五相成身観を説くものと予想されている。そこでは、①通達菩提心で出現した第一の月輪にAをはじめとする母音が布置され、

¹² 『サマーヨーガ・タントラ』、母タントラの最初期のものと考えられている。[田中公明、2023、『インド密教史』、春秋社、p.237]

②修菩提心において出現した第二月輪が「太陽」つまり日輪となり、Kaをはじめとする子音が布置される。『大日経』「百光遍照王」においては、大日如来の単性生殖により種々の尊格を生み出したが、『ヘーヴァジュラ』では母音を布置した月輪と子音を布置した日輪による両性生殖の原理が持ち込まれた。さらに、③成金剛心において観想された金剛杵は女神たちのシンボルであるカルトリ(肉切り包丁)に変わり、三者は融合し(④証金剛身)、それによって仏の姿が完成する(⑤仏神円満)と考えられ、五相成身観に対応していく。

この思想がゆっくりではあるが発展し¹³、後期密教系の無上瑜伽タントラでは、①大円鏡智である月輪、②平等性智である日輪、③妙觀察智である種字と標標、④そして一体となる成所作智、⑤清浄法界智である身体の完成という五段階からなる五相成身観¹⁴を説くといわれるようになる。

十二縁起への性理論の導入

後期密教に属する父タントラ『秘密集会タントラ』のジュニャーナパーダ流¹⁵では、曼荼羅の観想が、十二縁起に配当されて解釈される。ジュニャーナパーダの『小口伝書』と『普賢成就法』¹⁶をもとに、それを見てみよう。

曼荼羅の生起に先だって、「三真実」と称せられる白・赤・青黒の「オーン」、「アーハ」、「フーン」の三種字が、虚空より自身の口に入ると観想する。これら三種字は、精液(白)と経血(赤)、そして胎内に取り込まれたガンダルヴァを象徴し、「無明」に相当する次第である。そして行者の口の中に入った種字は月輪に転変し、月輪の「フーン」字は赤色の金剛杵となり、そこから毘盧遮那の父母仏が生まれる。その放つ光明から曼荼羅の楼阁が現れる。以上が「行」に相当する次第であり、五相成身観の性理論の考えが導入される。

そして曼荼羅の楼阁の中には、諸尊の座となる日輪と月輪が観想される。主尊文殊金剛が坐す中央の月輪の上には、さらに二つの月輪が観想される。受胎における父と母の要素を象徴する。そして二つの月輪が溶解し、その後持金剛仏の身体が完成すると観想する。

ここで誕生する持金剛は、曼荼羅の諸尊すべてを出生する根元的存在なので、「因の持金剛」と呼ばれる。以上は**自利円満**、つまり自らのために成仏する次第といわれる。

¹³ 田中公明[1997]、p97-98

¹⁴ 後期密教では、五相成身観を2つの立場から解釈している。1つは受胎から出産までの間に肉体が完成するプロセスを、ブッダが成仏の五相成身観とパラレルであると解釈する「外の五相成身観」である。もう一つは、無上瑜伽タントラに説かれる五相成身観に、生理学説を当てはめたものであり、『ヘーヴァジュラ・タントラ』のように、中有の衆生が母親の子宮に取り込まれる過程を解釈するものであり「内の五相成身観」とは呼ばれる。

¹⁵ 「ジュニャーナパーダ流」は、ブッダジュニャーナパーダによって創始された。彼は文殊から『秘密集会』の奥義を伝授され、『大口伝書』『小口伝書』『普賢成就法』などの十四部書を著したと伝えられる。このうち『小口伝書』では、曼荼羅の観想が、十二縁起に配当して解釈されているのが注目される。

¹⁶ 東北,1855

つぎに、世界の母とされる金剛界自在母という女性尊が観想され、曼荼羅に描かれるすべての尊格を生み出す。すべての衆生に、樂を与える次第（利他円満）といわれ、「識」に相当する。明らかに「識」に相当する次第は、性行為をシミュレートするものである。ジュニャーナパーダは、曼荼羅に描かれる諸導の出生を、衆生の受胎のプロセスになぞらえることにより、曼荼羅の観想に性理論を導入したのである。

つづいて、四仏母が、持金剛仏を勧請し、これに応じて持金剛は、衆生を救済するために色身を出現させる（「名色」に相当する次第）。ここにおいて、文殊菩薩の密教的形態、文殊金剛が出現する。そして文殊金剛の、眼耳鼻舌身意の六つの感覚器官には、六菩薩と色声香味触法の六金剛女が布置され「六処」となる。これにより、「六通」が獲得されるが、これが「触」に相当する。そして感覚器官を加持した後、身口意の三業を加持するのが、「受」に相当する次第であり、文殊金剛と一体化し、阿閼如来を宝冠中に戴くようになるのが「愛」に相当する次第である。

そしてつぎには、いよいよ文殊金剛の配偶者となる明処が出現する。そして、『秘密集会タントラ』『第六分』に説かれる「オーン・サルヴァタターガターヌラーガナヴァジュラ・スヴァバーヴァートマコーハム」（オーン）、我は金剛[の如く堅固な]一切如来への愛着を自性とする者なり」という真言とともに、いよいよ性行為を始める。そして曼荼羅の主尊文殊金剛と妃のマーマキーが生まれるのが「生」と「老死」に当てはめられている。『小口伝書』では、この性行為を「取」にあてはめ、それによって主尊が出生する段階を「生」と「老死」の二支に当てはめたのである。

このような性の儀礼化は、中有の衆生が母親の子宮内に形成された精液と経血の混合物の中に取り込まれるという、受胎のプロセスをシミュレートすることによって成立している。

少しまとめておこう。『俱舍論』『三世兩重の因果』説では、男女の性行為は、前世の一生を終えた五蘊が現世の母親の子宮に吸着される「識」と、現世が終わり未来の母親の子宮に宿る「生」の二局面に現れていた。一方、ジュニャーナパーダ流では、五相成身観の性理論を取り込み、『秘密集会タントラ』における曼荼羅の観想において、前者（「識」）を曼荼羅の主尊を生み出す「因の持金剛」の出生、そして後者（「生」）を「因の持金剛」からの曼荼羅の主尊の出生と解釈した。すなわち、「十二縁起」の各支を曼荼羅の生起と結びつけ、これによって輪廻転生のプロセスを聖化しようとしたのであろう。このように『秘密集会』において、曼荼羅の生成的な観想法と性理論が結びつき、「生起次第」という後期密教の実践階が成立したのである。

3) 究竟次第

後期密教における二次第の一つとして「生起次第」と並び称される「究竟次第」は、生理学的な方法により、人工的に神秘体験をつくりだすテクニックを基としているが、それはどのように成立したのだろうか。『ヘーヴァジュラ・タントラ』から、究竟次第の成立過程を概

観する。

密教に身体論をはじめて導入したのは、中期密教を代表する『大日経』であり、地水火風空の五大を象徴するア、ヴァ、ラ、ハ、カの五字を、腰下・臍・心臓・眉間・頭頂に布置する「五字厳身観」が説かれた。このように密教では、身体には重要なポイントが隠されており、それらを視覚化し、精神を集中して働きかければ、特殊な効果が得られると考えたのである。そして後期密教では、これらのポイントが「チャクラ」と呼ばれるようになる。

『ヘーヴァジュラ』では、「第二儀軌」第四章において、4つのチャクラ（大楽輪、受用輪、宝輪、変化輪）が明確に説かれている。脊髄に並行してアヴァドゥーティーと呼ばれる脈管、その左右には、ララナーとラサナーと呼ばれる脈管が説かれている。これら三脈管は並走しているが、上端と下端において接合しており、途中の四箇所でも接している。その部位が、チャクラであると考えられたのである。このように四つのチャクラと三つの脈管に基づく生理学説は、「四輪三脈」説と呼ばれる。

究竟次第系の生理学的ヨーガでは、精液が「世俗の菩提心」と呼ばれて重視されるようになった。一方、本来の菩提心は、「勝義の菩提心」と呼ばれて区別された。そして『ヘーヴァジュラ』以後の母タントラでは、射精を抑制しながら脈管の下端つまり、生殖器の基底部に生じた快感を、次第に上のチャクラに上昇させるテクニックが重視されるようになる。

この場合、生殖器の基底部で発生した快感が、上昇して四つのチャクラに波及する瞬間が、①種々(ヴィチトラ)、②異熱(ヴィパーカ)、③摩擦(ヴィマルダ)、④離相(ヴィラクシャナ)の「四刹那」であり、そこで体験される快感は、それぞれ①歓喜、②最勝歓喜、③離喜歓喜、④俱生歓喜の「四歓喜」と呼ばれ、快感を持続させる④俱生歓喜が最終目的であるとされた。そのため、精液の放出を抑制しつつ、第四の俱生歓喜を成就することが、生理学的ヨーガの課題とされるようになった。その実践においては、精液は菩提心と等同であり、それを放出することは菩提心を捨て去ることを意味した。そこで行者は、覚醒中はもちろん、睡眠中も夢精を防ぐため、涙ぐましい努力を強いられることになったのである。こうして、『ヘーヴァジュラ』は、「四輪三脈」の身体論と、これに基づく四刹那・四歓喜という概念を導入することにより、このような生理学的ヨーガを究竟次第として体系づけたのであった。『ヘーヴァジュラ』における生理学的ヨーガの本格的導入は、土着信仰から入った性的要素に新たな宗教的意味を与えたと思われる。

4) 後期密教の灌頂体系

密教は文字通り、秘密の教えであり、資格を得たものにだけ示されるのである。その入門儀式が灌頂である。後期密教では、『密集会タントラ』『第十八分』に基づいて、①瓶、②秘密、③般若智、④第四の4つの四灌頂を行う。そのうち、②秘密、③般若智の2つの灌頂は、性的な要素を含み、問題が多い。以下、各灌頂儀礼について、簡単に見ておこう。

1. 瓶灌頂

①瓶灌頂の内容は、おおむね中期密教の灌頂体系を継承するものとなっている（投華得仏）。この灌頂を受けて、「生起次第」の実習を許可された。

2. 秘密灌頂

②秘密以下の3つ灌頂は、後期密教独特のものであり、後究竟次第実修の資格を与えるものとされている。秘密灌頂では、まず受者が阿闍梨に妙齡の女性を献ずる。このとき、実際に女性が用いられる場合と、阿闍梨が瞑想に入って理想的な女性パートナーを観想するという、二つのケースがある。前者は「羯磨印」、後者は「智印」と呼ばれる。これに対して、女性が灌頂を受ける場合は、「方便」として男性が与えられる。

そして阿闍梨は「印」と交わり、金剛杵(男性器)の中に蓄えられていた菩提心つまり精液を取り出し、薬指と親指の先で摘んで、弟子の口中に投入する。これによって、弟子に菩提心を授けたと観想するのである。多少の相違はあるが、このような儀礼は、当時においても、猥雑極まりなく、受者には覆面を施し、実際の行為を見せてはならないとも説かれている。

3. 般若智灌頂

③般若智灌頂では、秘密灌頂を受けた弟子が女性と交わる。後期密教の本尊は、妃を抱擁する。妃は、仏の境界である「般若大樂」を象徴し、女性（妃）と交わることで、本尊の境界を悟るのである。このとき受者は、精液の放出を極力抑制し、四刹那と四歓喜を体験しなければならない。

4. 第四灌頂

④第四灌頂では、前二者とは異なり「言葉のみによる灌頂の宝」とであるといわれる。阿闍梨が最後に、受者に特別な教示を授けることを意味し、これを受けなければ、究竟次第を実修しても、他に講説することはできないとされている。第四灌頂に関しては、津田真一の解釈¹⁷があるが、具体的な記述文献は乏しい。

中期密教における灌頂儀礼は、後期密教においては、第一段階に格下げされ、土着宗教から取り入れられた性的儀礼を、第二、第三灌頂として付加したと考えられる。そしてさらに、究極的真理の伝授として第四灌頂がもちこまれたのであろう。

後期密教の灌頂と出家者の戒律

僧侶が性的儀礼を行えば、女性との接触を禁じた戒律を犯したこととなるのは当然であり、社会的に見ても、大きな抵抗があったと考えられる。実際、インドの後期密教を忠実に継承したチベットにも、性的な儀礼を含む灌頂が紹介されたが、当然のことながら大きな問題をひき起こした。現代でもチベットでは後期密教系の四灌頂が行われているが、実際には女性パートナーを用いず、男女の精液や血液も着色された飲料などで代用されて、かなり形式化

¹⁷ 「性的実践は一種の手段とみなされ、真理の命題は第四灌頂によってこの密教的実践の及ばない遙か彼方に提示される」という。つまり阿闍梨の精液を服用させることで、本当に菩提心が植えつけられる。本尊の妃になぞらえられた女性と交渉することで「般若大樂」が体験できるというのは、象徴万能主義であり、真の悟りはそれを超えたところにあることを教えるのが、第四灌頂だということである。

しているようで、実際の儀礼は日本密教の灌頂と大差がないといわれている。

5)『サンヴァラ』系後期密教経典¹⁸

身体曼荼羅

密教の身体論の一つの到達点を示すサンヴァラ系では、身体曼荼羅が性理論に基づく身体論と曼荼羅が発展する。後期サンヴァラ系では、これまでの密教理論を継承しながら、曼荼羅の諸尊を身体の各処に布置することで、身体論と曼荼羅を一つの体系に統合した。これによって行者の身体は、一つのマイクロコスモスと化すこととなった。そして後期サンヴァラ系で出現した、人体をマイクロコスモスと見る思想は、『時輪タントラ』において究極にまで推し進められるのである。

究竟次第

身体曼荼羅に続き、究竟次第として、『サンヴァラ』の五次第が説かれる。田中公明は後期サンヴァラ系の究竟次第をチベット仏教サキャ派のパクバ(八思田)が著した「チャクラサンヴァラの五次第の秘訣」によりながら、後期サンヴァラ系の究竟次第を概観している¹⁹。長いので、簡潔にその要点だけを示す。

『サンヴァラ』の五次第は、『秘密集会』『聖者流』の「五次第」とは異なり、①自加持次第、②種々羯磨杵次第、③摩尼充滿次第、④ジャーランダラ次第、⑤不可思議なるウディヤーナ次第の五つの次第から構成されている。それぞれ、①自加持次第：生起次第を前行として修した後、心臓に微細な月輪を「ア」字より生起し、その上に赤白のティクレ、つまり茶子粒大の微細な点を観想する。続いて、各感覚器官にティクレを観想し、精神の集中力を高める。②種々羯磨杵次第：種々の感覚器官に精神を集中することにより、種々神通力を得る。次には、頭頂のチャクラ(大樂輪)、喉のチャクラ(受用輪)、臍のチャクラ(変化輪)に文字、チャクラの弁上に、文字とティクレを順序通りに修習し、光の放射と調息を行って大樂の三摩地などの神通力を得る。③摩尼充滿次第：後期密教独特の女性パートナーを用いる性的ヨーガで、「羯磨印」つまり実際の女性を用いる場合と、「智印」すなわち理想的な女性を観想して行う場合がある。④ジャーランダラ次第：ジャーランダラ孔、すなわち頭頂の穴から菩提心が体内に入ると観想するので、このように呼ばれている。⑤不可思議なるウディヤーナ次第：字の要素がつぎつぎに解消してゆく後期サンヴァラ系に特徴的な、「随滅」(アヌペーダ)と呼ばれる観想法であり、最終的にナーダ点を虚空に解消させ、「無分別」つまり概念的思考を離れた三昧に好きなだけとどまる。

このように、『ヘーヴァジュラ』において後期密教に本格的に導入された生理学的ヨーガが、後期サンヴァラ系において、五次第という複雑な実践階梯に組織された。後期サンヴァラ系の究竟次第は、性的なヨーガに加えて、呼吸を徐々に抑制して、ついには長時間の止息に至

¹⁸ [田中公明、1997]では、『ヘーヴァジュラ』以後に出現した新しいサンヴァラ系タントラを、後期サンヴァラ系タントラと呼ぶ。

¹⁹ [田中公明、1997]、p.134-142

る調息のテクニックと、身体の一点に精神を集中する「微細瑜伽」（ディクレ）を、主な構成要素としている。

7) 終わりにかえて：仏教における性理論の導入

後期密教は、土着の宗教と考えられる猥雑な「尸林の宗教」から発展し、母タントラへと進んでいった。母タントラの究意次第は「楽」、つまり性快感を持続し高める生理学的ヨーガとして発展した。なぜ、このような一見反社会的とも思える宗教が発展したのであろうか。一つの理由として感挙げられるのは、土着宗教が持っていたヨーガの技法が神秘的体験を得るには、かなり効果の高いものであったため、後期密教に残ったのであろうということである。もしかしたら、自律神経のコントロールまで可能であったのかもしれない。もちろん、中世インドにおける農業生産力の増大や西方世界との海上貿易による富の蓄積により、社会に快楽的な風潮があったことも外的な要因の一つと考えられるであろう。

土着宗教の行き過ぎた性的儀礼や墓場での儀式は、徐々に仏教教理へと高められていったようであるが、ただ、性理論を受容した背景には、仏教教理が初期から輪廻転生や十二縁起の思想を持っており、性行為を死者の五蘊が新たな胎児の体内に転移する局面として、受け入れやすかったことも、性的理論を受け入れた原因の一つであろう。

究竟次第のヨーガの手法を考えると、中期密教を代表する『大日経』に説かれた「五輪説」は、後期密教のチャクラ説の出発点となり、『金剛頂経』で導入された「微細瑜伽」は、後期密教で多用される生理学的ヨーガへと発展していったのであろう。後期サンヴァラ系の究竟次第は、これらのテクニックを組み合わせ、一つの実践階梯に組織したものと見ることができた。これは、土着の宗教から出てきたヨーガの手法が強力であったことを示しているのかもしれない。チベットにおいては、究竟次第が単なる性的なカルトの域を脱し、生理学的な方法を用いた宗教実践階梯へと高められ、生き残ったと思われるが、これについてはまた別の機会に述べてみたい。